

# 空



2015 · 12

**SORA** 64号

東京 古川 夏子

折紙でつくる恐竜秋日和

日展を抜け出して行く恐竜展

月球儀子らに兎の跳ねてをり

いくたびも地を掠めゆく帰燕かな

人參を花型にぬく片思か

須江 苑 実 耶

伸びをして出て行く猫や葉鶏頭

傷跡の上に傷口秋暑し

蓋はれて柵田に残る稲刈機

もみぢ狩夫に引かるる男坂

挨拶のあとは寒さを言ひ合へり

京都 天谷 翔子

旧道に出で秋風となりにけり

クラクション鳴らせば零余子ほろほると

一番線より月光の観覧車

木魚叩けば鬼の子が貌を出す

右左見て出口なき秋思かな

福岡 白水 良子

反論をひとまづ控へ新走り

言ひ過ぎし悔あり夫へ鮎を焼く

秋の蚊を打つ満身の力もて

檸檬見て大きく動く喉佛

波郷忌や廊下の長き療養所

大阪 田岡千章

新宮 井浦美佐子

蓑虫の大き夕日に仰け反りぬ

活け終へて壺にこぼるる子蟻螂

ラ・フランス姫様だつこはもう出来ぬ

貰うたりやつたりしたる菊日和

感情線頭脳線へと種を採る

雁渡る他郷の墓を訪ふ途中

竹の春老いてたやすく従はず

银杏散るあかあか灯る写真館

髭撫でて考へてゐる獺祭忌

蒲団縫ふ母と四隅を引き合ひて

山梨 野畑さゆり

北海道 押田裕見子

丸善に洋書の匂ひ涼新た

早乙女のたすき花笠風匂ふ

鬼灯の色深まりて忌日かな

ときとして列を離るる雁もをり

雨雲に急かされ父祖の墓洗ふ

繰り言を巧みに躲す秋の風

正座して住職を待つ初紅葉

秋雨の一人に余す男傘

潮焼けの笑顔より買ふ初秋刀魚

燃ゆるほど重き影ひく照紅葉

東京 今井 春生

生まれきて二足目の靴天高し  
マネキンの今日より秋の顔したる  
名月や水面に影の定まらず  
蓮の実や崩れかかりし寺の堀  
棚田道秋の七草揃ひけり

福岡 亀井 紀子

学舎は更地となりて秋夕焼  
紅葉谷見えて湯舟の女身かな  
会釈して上り下りの秋遍路  
葱刻む前に後に猫の声  
触診の乳房は冷えて暮の秋

東京 遠山のり子

露座仏の賽銭光る小六月  
竹垣の向かうに雀一茶の忌  
豊の秋貸し農園の賑はふ日  
木の実落つ森のパワーの音立てて  
遠く来て三十階の冬の月

大阪 青木 朋子

競演のやがて共演虫すだく  
夕光に透くコスモスの花の群  
虫の音や乗換駅の地下通路  
天地に委ねどんぐり木を離る  
慈雨の夜の明けて再び虫の声

空作品抄  
柴田佐知子抽出

まだこの世枢の中も秋の暮

あさがほに梱包されてゐる空き家

鬼灯や永劫母はわたしのもの

灯を消せば鳴く梟が枕辺に

山茶花散るペン休めても握りても

夜ごと姫太りてゐたる菊人形

要するに男と女西鶴忌

群とんぼ伽藍の前の大広場

昼よりも夕べ明るき花白粉



深川 淑枝

栗原 京子

吉田 菫

宮井 知英

中田 みなみ

永淵 恵子

松田 明子

松尾 龍之介

戸栗 末廣



残り蚊と神父待ちぬる懺悔室

石積の裾の出でくる陸稲刈

冬霞棚田は神の高さまで

師の逝きて月のいびつになりにけり

乗りてより行き先決むる賜日和

包丁をぎくしやくさせて八つ頭

朝焼の外輪山に牛放つ

ルビを振り幼児に出す年賀状

市へ出すしきりに跳ねて当歳馬

慶びを仏に告げぬ鶏頭花

穴熊の檻に死亡の小さき文字

石の橋出水がこえて来たりける

水打つて静かに風を待ちにけり

芦刈られたる浮島をつまらなし

林 徹也

田中とし江

岸 洋子

山本則男

矢野百合子

原 友子

秋 千晴

小林朱夏

千波 悠

石川 叔子

古川 夏子

織田 高暢

田坂 能雄

松山 暁子

波音は汀に果つる新松子

無住寺に人の気配や実南天

鳥になる忍者にもなる運動会

卓ごとに違ふ野の花走り蕎麦

秋日傘きのふ白波立ちし浜

旅客機の腹はつきりと芒原

望の夜は疑ふことを忘れけり

悪女とは美女であるべし秋刀魚焼く

深秋や眠りしごとき蔵二つ

コスモスを活けて故郷も子も遠し

爽籟の高さに白きマリア像

小春日の縁側で切る母の髪

行く方もいづれ来し方鱗雲

供華はみな鶏頭ばかり村の墓

森 俊 人

野畑さゆり

苑 実 耶

田代民子

田邊豊子

えとう樹里

今井春生

天谷翔子

山 内 碧

西住三恵子

白水良子

横田敬子

押田裕見子

桐 山 甫



中座して席に蜜柑を置かれけり  
曼珠沙華枯れて落ち着く道祖神

天に星地に秋明菊の薄あかり

とりこはす家の奥より昼の虫

濁声で騒ぐ野分の群れ鴉

屋号もて呼び合ふ郷や柿熟るる

秋茜隣の駅が見ゆる駅

隠れの灯すべて灯れり降誕祭

散紅葉別れ話を切り出され

病む母の新米の香をよろこべり

水差すと若やいでくる菊人形

柁の花二番手の気楽さよ

大西日平屋の暮しつつましく

秋簾一番星へ巻き上ぐる

あさなが捷

山田正子

田代貞枝

田口萬智子

井上和子

窪みち子

遠山のり子

小谷一夫

橋本知笑

立花一枝

村上二三

仲里奈央

荻悠子

田岡千章



母の家を去る日や白き曼珠沙華

まだ癒えぬ膝なり鴨に会ひにゆく

暖房やあそび疲れて猫膝へ

蝙蝠や水に沿ひたる裏通り

御九日のしやぎりの音より旅立ちぬ

帰りには吠えぬ番犬秋日和

明月や深夜トラック都市目指し

外井戸の残るふる里柿紅葉

山里のりんごに冷えし頬当つる

色づいてゆく柚子を見るお縁がは

軍艦の水脈を引き去り冬の虹

山なみの浮かびあがりし十三夜

最終バス発ちたるあとの虫しぐれ

裏庭に犬おとなしき夜の神楽

岡村尚子

岩井京子

植田洋子

吉村撰護

山口弘子

青木朋子

清水量子

上川いつ子

本多トミ

三輪敏夫

わたなべ漣

村上典子

ふじの茜

森 真二

# 空作品評

柴田佐知子

まだこの世極の中も秋の暮

深川 淑枝

〈まだこの世〉と大きな氣息で始まる。生者はすでに死者へと変つていっているが、極の中にはまだ姿が確かに在る。生者に流れる時の中にまだなきがらは在るのだ。多くを述べずとも、古くから詠まれてきた寂寥や「もののあはれ」の情を負う季語〈秋の暮〉が充分に作者の思いを伝えてくれる。深い内容が静かな言葉の選択と端正な調べで詠まれている。

あさがほに梱包されてゐる空き家 栗原 京子

私も近所の空き家がすっぽりと朝顔に覆われている景を見ていた。しかし「覆はれてゐる空き家」と詠んだのでは、単なる報告の域を出ることが出来ない。〈梱包されてゐる〉とは斬新だ。しかも景は鮮明。京子さんの独自の表現力にはいつも驚かされる。

鬼灯や永劫母はわたしのもの 吉田 稗

母上はもう亡くなられているのであろう。だからこそ誰にも与えることなく、母のすべてをへわたしのもの」と言い切ることができると思う。

〈永劫〉という言葉は、漠然としながらも強烈な力を持つている。焦点が絞られた具象と、省略によって生まれる空間とが響きあい詩へと昇華することが多い俳句では、〈永劫〉といった種類の言葉を使うと、そこだけが作り物めいて浮き上ってくることもある。しかしこの句に於いては、作者の心から溢れだした母恋いの情と一体になって真直ぐ読む者に迫ってくる。印象深い作品である。

花ならば茶の花季の齡かな 中田みなみ

山茶花散るペン休めても握りても

栗食むや栗鼠と変らぬ仕草して

〃

みなみさんの第四句集『桜鯛』が高評である。東京句会でみなみさんを慕う方々を指導され、国内はもちろん海外へも足を伸ばされ作句されている。そのお姿は私の目標とするところである。

『桜鯛』の帯に「今春卒寿を迎えられたとは思えぬ瑞々しさ、大らかさ。好奇心に満ちた眼差しでまつすぐ本質に迫る。中田みなみさんの世界は自然体で斬新

である。〱と記した。

一句目、老いを詠んでもその瑞々しさは際立つてい  
る。茶は初冬に下向きの五弁の白い小花をつける。蕊  
は美しい金色で芳香を放ち、静かで楚楚とした趣があ  
る。〈茶の花季の齢〉とはなんとという美しい措辞であ  
ろう。齢を重ねること得る表現があるのだ。老いる  
ことの豊かさを感じた作品である。

二句目の木の辺りを染めるようにはらはらと散り繼  
ぐ山茶花、三句目木の実を食べる時の栗鼠の姿。これ  
らが作者の日常の景によつてかろやかに掬い取られて  
いる。

〱以下略〱

# 空集

## 柴田佐知子選

大揺れの車や猪の荒らす道

粕屋 吉田 菫

さ牡鹿の鬨つてゐるしろまなこ

仁王より押出されし秋遍路

秋の蚊の刺して仏へ逃げこみぬ

堅く口縛りて届く今年米

鬼灯や永劫母はわたしのもの

破蓮闇に聳ゆる裁判所

千年の杉の闇ある神楽かな

爛爛と鷺の眼のある冬景色

採りたての白菜割れば仄ぬくし

闘病は隠者の如し冬椿

灯を消せば鳴く梟が枕辺に

粗衣粗食通せし母や青木の実

山茶花散るペン休めても握りても

栗食むや栗鼠と変らぬ仕草して

カシミアの感触木の葉髪払ふ

湯疲れの柚子に深夜の雨激し

北九州 深川 淑枝

まだこの世極の中も秋の暮

のぼりくる名月へ開け極窓

ひたひたと秋の潮さす枕飯

玄海に月高々とかりもがり

道行のしばらく花野がかりかな

木霊ごと倒れたる樹や野分過ぐ

不知火の裏さびさびと潮流る

あさがほに梱包されてゐる空き家

風の名の船が動かぬ残暑かな

秋晴や駅前にある自転車屋

僧を待つ静かな座敷石路の花

鬼女出でて雲の速さや薪能

風呂桶に水をたつぷり野分前

福岡 栗原 京子

東京 中田みなみ

糸田 宮井 知英